８　教育実践の歩み

（１）委嘱研究

ア　研究委嘱（平成８・９年度上尾市教育委員会）

（ア）研究主題

豊かな心を育む環境を考える

～身近な環境に関わって生き生きと生活する幼児の姿を通して～

（イ）研究の概要

ａ　主題の設定の理由

幼児期は、生活の中で自分の興味や欲求に基づいた直接的・具体的な体験を通して心情、意欲、態度が培われる時期である。

このようなことから教師は、幼児が興味・関心をもって周りの環境と関わり、発達に必要な体験を得られるような教育環境を作り出し、その環境の中で遊びを通して、心身ともに健康な幼児を育てることが大切である。

今日、子供達を取り巻く環境は物があふれ、欲しい物は何でも手に入る時代である。家庭内の遊びもテレビ、ファミコン、ビデオ等の受け身的な遊びが中心であり、また核家族化、少子化傾向によって、兄弟、友達との交流や子供同士で遊ぶ機会が少ない等、質的変化により、人間関係が希薄になってきていると言われている。

そこで、幼稚園生活の中で教師や友達等、人との関わりを深めながら、感動する心や楽しさ、悔しさ、思いやり等の様々な体験をすることで、生きる力の基礎となる豊かな心や、意欲、態度が、遊びを通して一人一人の幼児の内面に育ち、心身の調和のとれた発達が培えるように、この主題を設定し、研究を進めることにした。

ｂ　研究主題の受け止め

豊かな心とは大きく漠然とした言葉であるが、幼児期の育ちから考えると美しいものを見て美しいと感じたり、楽しい時、悲しい時、嬉しい時等の喜怒哀楽を素直に表現したりする子や思いやりの心やぬくもりをもてる子ではないかと捉える。

（ａ）幼児が素直に表現できる心を育てるには

①幼児が自分の思いを表現できる雰囲気があること。つまり、教師との信頼関係や他の幼児との仲間意識がしっかりしていること。

②教師に認めてもらう、褒めてもらう等の経験をたくさんもつこと。

③教師や友達と十分に関わる経験や心を揺さぶられるような感動体験をたくさん行わせること。

④いろいろな遊びを通して達成感、挫折感、葛藤、充実感等を繰り返し体験する中で自分を知ることや、友達の考えや存在に気付いていきながら、心身の調和のとれた発達をしていくこと。

⑤何でも受け入れ吸収していく多感な時期に、教師が一人一人の幼児の感じ方や気付きを受け止め、さらに、心の動きを汲み取り関わること。

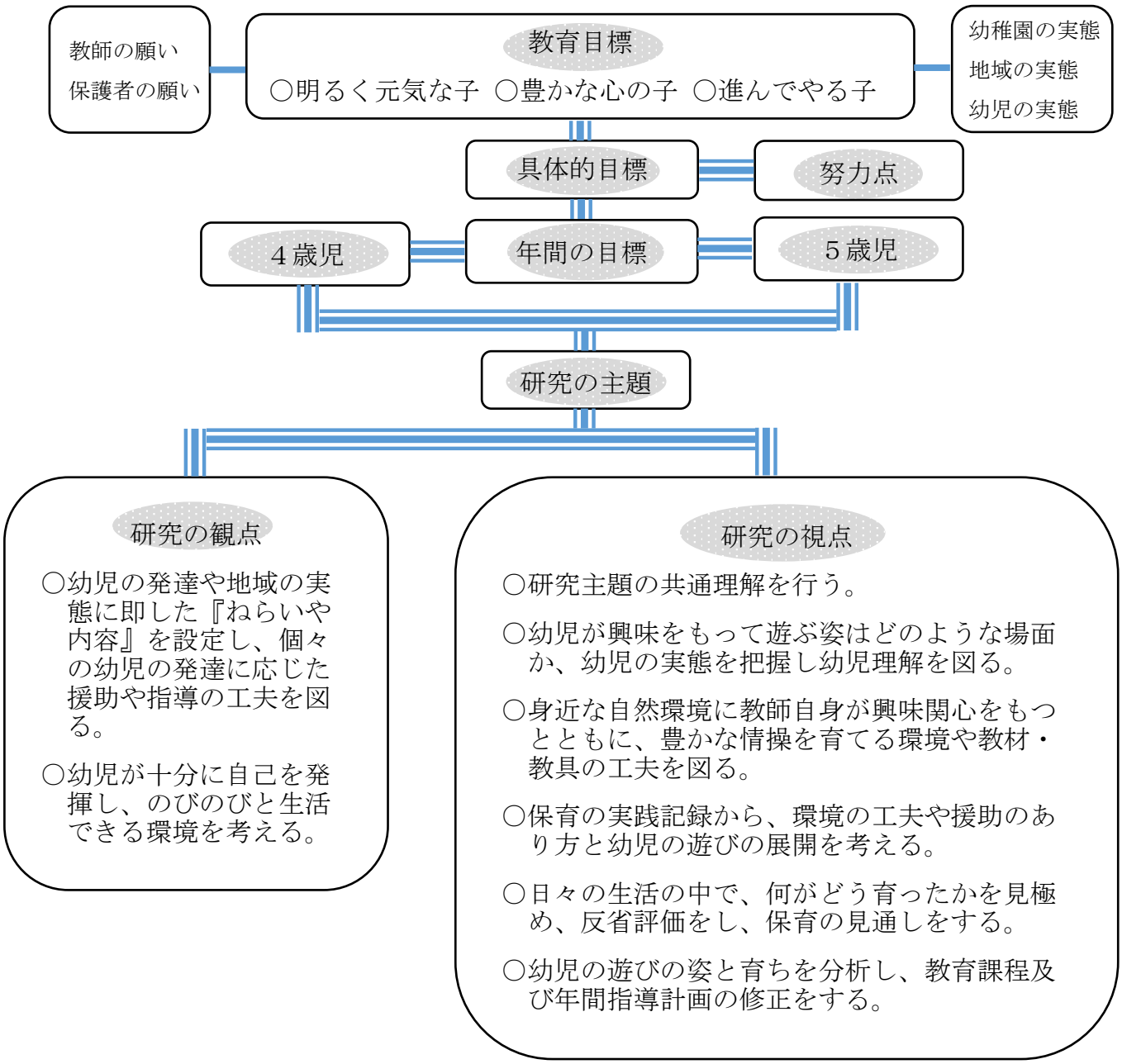
（ｂ）思いやりの心を育てるには

思いやりとは、相手の立場に立って考え、相手の気持ちを汲む能力であると捉える。つまり、自分の行動が相手にとって困るのではないかと考え、その行動を我慢する自己統制が育つことである。そこで、思いやりのある子を育てるためには、幼児の自発性を育てることが重要である。自発性が順調に育てば、意欲が盛んになり創造性も発達する。そして、思いやりと意欲が基盤になって社会性が芽生え、友達との向き合い

も盛んになると考える。

このようなことから、教師は、幼児が生活している背景を考え、幼児理解を図り、幼児の興味や関心に基づいた環境を構成し、その環境の中で友達や教師との関わりを深めながら充実感を味わえる園生活にしていくことが大切である。また、十分に遊びに取り組める時間と場、用具や素材を用意するとともに、一人一人が満足のいく遊びをしているか、幼児の遊ぶ姿から内面を捉え、個々の幼児の発達に応じた援助や工夫をしていくことが重要であると考える。

c　研究の全体構想



d　具体的な取組

（ａ）４歳児

事例１　「Ｔ男の姿をおって」－日々の保育の記録から－　資料１

事例２　「積み木遊びを通して」－友達との関わりができてきた頃の事例－　資料２

（ｂ）５歳児

事例３　「どんぐりを使った遊びを通して」　資料３

（ウ）まとめと今後の課題

a　まとめ

幼児が生き生きと生活する中で、豊かな心を育み成長していくためには、園具や遊具という物的環境はもちろんのこと、人的環境である教師の影響が大きいことを痛感した。そこで、いかに教師の関わりが重要であるかについて、事例を通して考えてみた。

〇事例１の幼児の育ちから分かるように、幼児の様子を温かく見守り、援助の手を差し伸べる教師のタイミングが指導のポイントである。それを見誤ると幼児は生き生きと遊ぶことができず、発達も見られないのではないか。幼児が今、何を考えているのか、どんな気持ちなのか、その場の状況を捉え、把握し、心を察して関わっていくことが大切である。

〇事例２に示すように、幼児は、用具の取り合い等でケンカを起こすことがある。幼児期のケンカは、自発性が順調に発達している子供同士の自己主張のぶつかり合いであるので、教師は表面だけの姿を捉えるのではなく、何が問題なのかを探り、トラブルへ対応することが必要である。

〇教師が、単に良し悪しの判断をしたり、教えたりするのではなく、幼児の心を受け止めることによって、幼児の情緒が安定し、他のことにも目を向けるようになり、遊びも豊かになる。

〇幼児は、家族や教師に見守られ、温かく接してもらうことで、心が安定し、他人を思いやる優しい心が育つ。

〇事例３に見られるように、友達と喜びや悲しみを共感し、生き生きと遊ぶためには、一人一人の幼児が存在感をもって安心して過ごせる居場所が必要である。そのためには、日々の保育の中で幼児のあるがままの姿や思いを受け止め、一人一人の良さや長所を認めていくことが大切である。

〇幼児の発想や主体的な遊びを受け止め、教師も共に遊ぶことで、その活動が発展し、幼児同士の関わりもより一層深まる。

b　課題

一人一人の幼児が、生き生きと園生活を過ごし、心身の正常な発達ができるようにすることが必要である。そのためには、教師が前述のような教師の関わり方を心に留めて指導にあたると同時に、幼児と共に遊ぶ中で、幼児の興味や欲求に応じた新たな環境を幼児と共に作り出し、遊びを通していろいろな体験を積み重ねていくことが大切である。

また、教師が心の窓を開き幼児に優しく接すると共に、幼児の目線で物を見、教師の考えを押しつけることなく遊びを見守り、幼児の自主性や思いやりを豊かにする保育に心がけて、指導に当たっていくことが大切である。